A 21　共働き家族の研究（5）——ケーススタディによる夫婦関係の考察

お茶女大家政　　袖井孝子　○小澤千穂子　佐野志津子
青葉女短大　　長津美代子

目的　昨年は、配票による大量調査を分析し、統計的に結婚満足度の規定要因を明らかにした。本年は、夫妻の両方に対し行なったケーススタディを用い、①配偶者に対する期待、②情緒的な面において、対象者にとってその配偶者はどのような存在であるかを中心に考察する。

方法　1985年6月～7月に、新宿・板橋・世田谷・品川各区内の保育園・幼稚園の4、5歳児クラスに子どもを通わせる夫婦1,238組に対し配票調査を行ない752組の分析対象を得た。1986年5月～11月に、それらの夫婦のうち調査の依頼に応じた21組の夫婦のそれぞれに面接調査を実施し、そのケースレポートを分析した。対象者の妻の就業形態は、無職8名、パート4名、常雇9名であった。

結果　幼児をもつ対象者達は、例外なく子ども中心の家庭生活を営んでおり、配偶者に対する期待も、互いに子の親としての役割を充分に果すことをあげるのが大勢であった。妻では、「父親として堂々としていてほしい。」「家族の要となってほしい。」などのように、夫が子に対して父親としての権威を持つことを期待する傾向がみられた。夫婦の呼称は、「お父さん」「お母さん」と呼び合っている場合が多く、相手に対して異性としての魅力を「感じない」と明言するものが、妻、夫共に半数近くあった。しかし、夫婦関係の重大な危機の経験は少なく、「今のままで良い。」という現状肯定型が多い。異性同士の情愛により結合する夫婦というよりは、子どもを中心とした家族としての一体感で結合している夫婦関係といえるだろう。